

1-2. 耳介、耳道に腫瘤形成を認めた犬猫の 5 例

○北川幸治¹⁾、丸尾幸嗣²⁾、柳井徳磨³⁾、柵木利昭³⁾、渡邊一弘¹⁾、山添和明¹⁾、工藤忠明¹⁾

1) 岐阜大学獣医外科学、2) 岐阜大学獣医臨床腫瘍学、3) 岐阜大学獣医病理学

【はじめに】平成 16 年 3 月から 7 月にかけて、耳介・耳道に腫瘤形成を認めた犬猫の 5 症例を経験した。これらの症例について、腫瘤の占拠部位と術式による予後、および X 線検査の意義と限界について検討した。

【症例】5 症例のうち、犬は 3 例（雑種 2、ミニチュアピンシャー 1）、猫は 2 例（雑種 1、アメリカンショートヘア 1）であった。平均年齢は 11 才（5～15 才）であった。5 症例のうち、1 例のみ雄で他は雌であった。初発は 3 例で、2 例は腫瘍（粘液肉腫、乳頭腫）の再発であった。腫瘤の部位は、耳道開口部から耳介内側の広範囲にわたった例が 3 例、耳道開口部に限局した例が 2 例あった。両耳に見られた例は 2 例、右耳に見られた例は 1 例、左耳に見られた例は 1 例であった。術前に慢性外耳炎を起こしていた例は 2 例で、術後に外耳炎がみられた例は 1 例であった。X 線検査において、4 例は鼓室腔に著変が認められなかった。2 例は耳道の陰影が不明瞭化し、2 例は耳道の陰影を確認できなかった。1 例で耳道の一部で石灰化を疑う所見が認められた。2 例は針生検による細胞診が行われ、それぞれ扁平上皮癌、メラノーマが疑われた。外科的処置としては、腫瘤が耳介の広範囲にわたった例では耳介と垂直耳道の切除が行われた。腫瘤が耳道開口部に見られた例では、垂直耳道切除が行われた。垂直耳道切除後、水平耳道にも腫瘤が認められた場合は、水平耳道切除も行われた。病理組織検査の結果は、良性腫瘍 3 例（耳垢腺腫、乳頭腫（2 例）、悪性腫瘍 2 例（粘液肉腫、扁平上皮癌）であった。3 例（耳垢腺腫、粘液肉腫、扁平上皮癌）のマージンは確保されていた。

【結果と考察】腫瘤が耳介の広範囲に認められた 2 例では、耳介と垂直耳道の切除を行い、現段階で再発は見られず、予後は良好である。腫瘍再発例である 2 例はいずれも腫瘤のみの摘出を繰り返しており、腫瘍の悪性度に関わらず再発していた。このため、耳介の広範囲に腫瘤を認めた場合は、腫瘤のみの摘出ではなく、大胆に耳介・垂直耳道を切除した方が良好な結果が得られると考えられた。一方、扁平上皮癌であった例では、同様の術式で、さらに病理組織検査上マージンが確保されていたにもかかわらず、術後 3 ヶ月後に再発してしまった。この原因として、術中に腫瘍細胞を播種させてしまった可能性があり、少なくとも今回のように耳介の腫瘤であって細胞診で悪性腫瘍が疑われた場合には、摘出する耳介・耳道の取扱に注意が必要であると考えられた。腫瘤が耳道開口部に限局した例では、腫瘤切除と同時にマージンを確保するために垂直耳道切除を行い、現段階で再発は見られず、予後は良好である。X 線検査において、2 例の耳道が確認できなかった原因は、腫瘍による閉塞と粘液の貯留と全く違うものであった。このため、X 線検査による耳道の病変や占拠部位の特定には限界があると考えられた。